

2021年5月16日 聖餐式説教

本日は昇天後主日です。昇天日は毎年必ず木曜日になりますので、その直後の日曜日には特に主の昇天を覚えることになっています。

さて、使徒言行録によりますと主イエスが天にお帰りになられる直前、弟子たちと主イエスの最後の会話が記されております。

使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。

主イエスが天国に帰られたのは、この世での働きをすべて終えられたからでしたが、それでは弟子たちはもう主イエスがいなくても立派に伝道していけるようになったのでしょうか。答えはノーです。それがこの最後の会話からわかります。弟子たちはイスラエルのために国を建て直してくださるのは…、と、主イエスがユダヤ民族をローマの圧政から解放してくださるのだと考えていました。驚いたことに弟子たちは、三年間共に生活し、教えを聞き、奇跡を見、十字架と復活を体験しても、まだ主イエスのことが本当にはわかっていなかったのです。主イエスはそのことを示すため、次のように言われました。

イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るころではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

すなわち主イエスはその間そのものを退け、地の果てに至るまで主イエスを伝える、天国を宣べ伝えられた主イエスを世界に伝えていく、世界伝道こそがあなたがたの使命だと言われたのでした。

このように主イエスが天国に帰られたとき、弟子たちは主イエスの使命を立派に担えるようになっているどころか、その姿すらまだはっきりは見えていなかったわけです。そのような中で主イエスはなぜ去っていかれたのでしょうか。ヨハネは次のように記しております。

今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。

主イエスは、実に弟子たちがこのような状態だったからこそ、この世から去らなければ

ならなかったのです。弟子たちはこれから誕生する教会の指導者として、伝道の責任を負うものとして強められねばなりませんでした。弟子たちを強めてくれるのが弁護者、すなわち聖霊です。聖霊降臨については来週学ぶことになっておりますのが、昇天日から十日後、弟子たちの上に聖霊が降され、その物音に集まってきた人々が主なる神の偉大な働きについて聞き、約三千人が洗礼を受けて最初の教会が誕生しました。主イエスが与えられた地の果てまで福音を宣べ伝えよとの使命が果たされ始めたのでした。そしてこれが世界にキリスト教が広められていく最初の日だったのです。弟子たちは見事にその使命を果たす者にふさわしく備えられたのでした。弟子たちがそうなるために、主イエスは去らなければならなかったのです。

主イエスに召され、三年間生活を共にして従ってきた弟子たち、十字架にかかるために捕えられたとき見捨てて逃げてしまった弟子たち、復活の主イエスに出会い、落胆の底から勇気と希望が沸き上がり、起き上がらされた弟子たち、主イエスとの別れはどんな気持ちだったことでしょうか。使徒言行録の中に、主イエスが天に上っていかれた時の弟子達の様子がこのように書かれております。『イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた』。これは弟子たちの当惑や寂しさをよく表わしております。しかし主イエスの聖霊の約束を信じて待った弟子たちは、さいほどの福音書にもありましたように、やがて大きな喜びで満たされ、世界へ何をも恐れずに出ていくことになったのです。

私達人間は、自分一人では生きていけません。自分を守ってくれる存在、自分を愛してくれる存在をもって一人の人間として生きていくことができます。しかし人間は一人の人格である以上、いつの日か自分一人で歩いていかねばなりません。生きて行くことも何をするにも、いつかは自分一人で歩いていかねばならないのです。教会の信仰生活もまた、この世の何物にも頼らずただ主なる神のみを信じて歩いていくことが教えられております。主なる神の働きをなす教会もまた、この世的な支えを求めず歩いていくときにこそ正しい伝道の業に励むことが出来ましょう。

主イエスが教え、弟子たちが信じた主イエスの決別の言葉に、私たちが耳を傾けてみましょう。

はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。

私たちがまた、主イエスの約束を信じ、日々ますます霊の賜物が与えられますようお願い、待ち望みたいものであります。